

2011年度 修士論文

スポーツ観戦行動に関する研究

- トランスセオレティカル・モデルの応用 -

A Study of Sports Spectator's Behavior ;

Application of Transtheoretical Model

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5010A008-5

飯島 沙織

IIJIMA, Saori

研究指導教員 間野 義之 教授

目次

第1部	1
I. 緒言	1
II. 研究1	5
1. 方法	5
1. 1 調査対象者と調査手続き	5
1. 2 調査内容	5
1. 2. 1 スポーツ観戦行動の変容ステージ	5
1. 2. 2 人口統計学的変数	6
1. 3 統計解析	6
2. 結果	7
2. 1 対象者の属性	7
2. 2 スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度の信頼性	7
III. 研究2	8
1. 方法	8
1. 1 調査対象者と調査手続き	8
1. 2 調査内容	8
1. 2. 1 スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度	8
1. 2. 2 スポーツ観戦行動指標	8
1. 2. 3 人口統計学的変数	9

1. 3 統計解析	9
2. 結果	11
2. 1 解析対象者の特性	11
2. 2 スポーツ観戦行動の変容ステージとスポーツ観戦行動指標との関連	12
IV. 考察	13
V. まとめ	16
 第2部	 17
I. 緒言	17
II. 予備調査	19
1. 方法	19
1. 1 調査対象者と手続き	19
1. 2 調査内容	19
1. 3 統計解析	19
III. プレ調査	21
1. 方法	21
1. 1 調査対象者と手続き	21
1. 2 調査項目	21
1. 3 統計解析	21
2. 結果	22

IV. 本調査	23
1. 方法	23
1. 1 調査対象者と調査手続き	23
1. 2 調査内容	23
1. 3 統計解析	24
2. 結果	26
2. 1 対象者の属性	26
2. 2 スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度の開発	26
2. 3 スポーツ観戦行動の変容ステージと促進要因・阻害要因の関連	30
V. 考察	33
1. 1 スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度の開発	33
1. 2 スポーツ観戦行動の変容ステージと促進要因・阻害要因の関連	33
VI. まとめ	35
引用・参考文献	36
【第1部】	36
【第2部】	39
付録 研究小史	42
謝辞	52

第 1 部

球技系トップリーグを対象としたスポーツ観戦行動の変容ステージ尺度

一尺度の信頼性およびスポーツ観戦行動指標との関連による妥当性の検討 -

I. 緒言

文部科学省は、新たなスポーツ文化の確立を目指し、2010 年に「スポーツ立国戦略」¹⁾を策定した。この中では、スポーツを「する」人や「支える(育てる)」人だけではなく、トップレベルの競技大会やプロスポーツの観戦など、スポーツを「観る」人にも着目をし、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことができる環境の整備を課題の 1 つとして取り上げている。しかし、実際のスポーツ観戦の状況は、J リーグを例にレギュラーシーズン 1 試合あたりの平均入場者数をみると、J1 が 1 万 8,965 人(2004)から 1 万 8,985 人(2009)とほぼ横ばい、J2 が 7,213 人(2004)から 6,326 人(2009)に減少し、5 年間で観客数の顕著な増加は確認されていないと報告²⁾されている。一例ではあるが、その他の競技を含め、今後スポーツ観戦者を増加させる方策が必要とされる。笹川スポーツ財団の調査³⁾によると、過去 1 年間のスポーツ観戦経験者 33.5%に対して新規観戦希望者は 39.3%であることから、既存の観戦者とほぼ同規模のマーケットが存在することが明らかとなっており、新規観戦希望者のスポーツ観戦を促進することが今後の課題の 1 つとなる。その中でも、球技系トップリーグは、トーナメントや個人競技の大会と異なり、レギュラーシーズンにおいて毎年一定の試合数、同じ参加チームで構成されていることが特徴である。よって、球技系トップリーグの観戦を促進させるためには、スポーツ観戦未実施者に観戦への興味を

高め、観戦行動を実行し、かつそれを維持させる方策を検討することが重要な課題となる。

消費者行動においては、AIDMA や AISAS など⁴⁾、様々な理論がスポーツに応用され展開されており、その中でも明確な数字を用いることができる観戦頻度において消費者を分類する Mullin⁵⁾の消費者エスカレーターが注目され、消費者の行動は段階的に上がっていくとされている。しかし、このモデルは、現在(過去)のスポーツ観戦頻度で分類しており、スポーツ観戦未実施者をさらに分類した「Nonaware noconsumer」「Aware noconsumer」を判断する明確な基準がないことが研究上の課題である。これまでのこの分野の研究においても、チーム・ロイヤルティ⁶⁾⁷⁾や観戦動機⁸⁾⁹⁾など、いわゆる現在の顧客を維持することを狙った、観戦者の特性に基づく分類や観戦者の心理的メカニズムをテーマとした研究が数多く報告されてきた。一方で、潜在的な観戦者を対象に含んだ研究は少なく、今後は新規顧客の開拓に着目するための第一歩として、スポーツ観戦未実施者を正確に分類する枠組みを提供する研究が必要であると考えられる。

行動科学の分野においては、個人が特定の活動を習慣化していく過程を理解するために、様々な行動科学の理論やモデルが応用され、数多くの研究がされている。最近では、喫煙に代表される不健康行動から、身体活動・運動行動等の健康行動など様々な習慣的行動の説明に利用されている Prochaska, DiClemente¹⁰⁾のトランスセオレティカル・モデル (Transtheoretical Model; 以後、TTM)が着目され、これらの行動を変容させるための段階に応じた介入を行う際に有効な枠組みを提供するとされている¹¹⁾。TTMの中心的構成要素は、過去および現在における実際の行動と、その行動に対する動機づけの準備性(レディネス)の両方の性質を統合した「行動の変容ステージ」である。行動の変容ステージ

は、前熟考期(Precontemplation: PC, 行動を行おうと思っていない段階), 熟考期(Contemplation: C, 行動を行おうと思っているが行っていない段階), 準備期(Preparation: PR, 不定期に行動を行っている段階), 実行期(Action: A, 定期的な行動を行っている段階), 維持期(Maintenance: M, 定期的な行動を継続している段階)の 5 段階となる。この尺度は、これまでスポーツ消費者行動で注目されてきた、明確な数字である観戦頻度を用いて消費者を分類する Mullin⁵⁾の消費者エスカレーターで課題となる、スポーツ観戦未実施者を行動意図によって分類することが可能となり、行動が習慣化していく過程を理解することができる。実際に、TTM の枠組みによって分類された前熟考期群にプログラムや情報を提供することで上位のステージへ移行させることが可能となることが、身体活動・運動行動¹²⁾¹³⁾や果物摂取行動¹⁴⁾, 禁煙行動¹⁵⁾等の健康行動に関する研究において報告されている。また、行動を促進させるだけではなく、ステージの逆戻りを防ぐ要因の検討や対策にも役立つと考えられる。

よって、本研究の目的は、観戦者を増加させる支援方策を検討する研究の枠組みとして TTM を応用し、球技系トップリーグを対象としたスポーツ観戦行動を対象として作成したスポーツ観戦行動の変容ステージの適用可能性を検討することである。具体的には、研究 1 でスポーツ観戦行動の変容ステージを評価する尺度の信頼性を確認し、研究 2 において尺度の妥当性を検討するため、変容ステージとスポーツ観戦回数やスポーツ観戦意図との関連を明らかにする。

本研究におけるスポーツ観戦の定義は、テレビ観戦を含まず、直接試合会場に足を運んで観戦することとした。スポーツ観戦の対象は、前述したように、スポーツ観戦未実施者

に観戦への興味を高め、観戦行動を実行し、かつそれを維持させる方策を検討することが重要な課題となる球技系トップリーグを対象とした。具体的には、プロ野球、Jリーグに加え、日本トップリーグ連携機構に参画しているリーグの中で、入場にあたって有料チケットが必要であり、かつ毎年シーズンで試合を開催しているリーグである、Vリーグ(バレーボール)、bjリーグ(バスケットボール)、JBL(バスケットボール)、WJBL(バスケットボール)、Xリーグ(アメリカンフットボール)、トップリーグ(ラグビー)、Fリーグ(フットサル)、アジアリーグ(アイスホッケー)、日本リーグ(ハンドボール)の11リーグとした。

Ⅱ．研究 1

1．方法

1． 1 調査対象者と調査手続き

既存の社会調査会社の登録モニターを対象として、インターネット調査を実施した。本調査では、社会調査に登録する 20 歳以上 70 歳未満のモニターを、平成 17 年の国勢調査の人口比率と均等比率になるように層化した上で対象者を抽出した。2010 年 11 月(T1)に回答した 210 名に対して、最初の調査から 2 週間後(T2)に同じ尺度を用いて再調査を依頼し、166 名[男性 83 名(50.0%)，女性 83 名(50.0%)]から回答を得た。

1． 2 調査内容

1． 2． 1 スポーツ観戦行動の変容ステージ

スポーツ観戦行動の変容ステージの評価は、Prochaska¹⁰⁾の開発した TTM の中心構成要素である「行動変容ステージ」を基に、スポーツ観戦行動を専門とする大学教員 1 名、行動科学を専門とする大学教員 1 名の有識者 2 名とスポーツビジネスを専攻する大学院生 2 名の計 4 名で検討を行い、調査項目を準備した。行動変容ステージは、前熟考期、熟考期、準備期、実行期、維持期の 5 段階からなり、過去および現在における実際の行動と、行動の準備性の状態を測定する項目で構成されている。スポーツ観戦行動に当てはめた場合、各項目の内容を、前熟考期「私は現在、スポーツ観戦をしていない。また、これから先(1 年以内)も観戦するつもりはない」、熟考期「私は現在、スポーツ観戦をしていない。しかし、近い将来(1 年以内)に観戦しようとは思っている」、準備期「私は現在、スポーツ観

戦をしている。しかし、定期的な観戦ではない」、実行期「私は現在、スポーツ観戦をしている。しかし、始めてからまだ間もない(1 年以内)」，維持期「私は現在、スポーツ観戦をしている。また、長期(1 年以上)にわたって観戦している」とした。定期的の定義は、「シーズン中において、3 ヶ月に 1 回以上観戦すること」とした。これは、各リーグのレギュラーシーズン期間が約 3 ヶ月～9 ヶ月と様々であり、1 シーズンを 3 ヶ月で区切ることが妥当であるとした。また、先行研究による過去の各リーグの年間の平均観戦回数³⁾⁹⁾からシーズン期間を用い、3 ヶ月の平均観戦回数を算出した結果、0.75 回以上となった。よって、3 ヶ月の観戦回数が平均観戦回数を超える 1 回以上を定期的な観戦と捉えることとした。

1. 2. 2 人口統計学的変数

性別、年齢の 2 変数について調査した。

1. 3 統計解析

信頼性の検討を行うため、2 回の調査に回答した 166 名を解析対象とし、調査・再調査間データについて対称性による類似度を示すカッパ係数(κ)を算出した。統計解析には、IBM SPSS Statistics18 を使用した。

2. 結果

2. 1 対象者の属性

調査対象者の主な属性は、表 1 に示すとおりである。男性、女性ともに 50.0%であり、平均年齢は 44.6 ± 12.9 歳であった。

表1 対象者の属性(研究1)		
全体 (n=166)		
	N	%
性別		
男性	83	50.0%
女性	83	50.0%
年齢		
20-29歳	28	16.9%
30-39歳	38	22.9%
40-49歳	31	18.7%
50-59歳	39	23.5%
60-69歳	30	18.1%
平均値(SD)	44.6	(12.9)

2. 2 スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度の信頼性

スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度の信頼性を検討するため、2 回の調査に回答した対象者 166 名から得られたデータについて、調査・再調査間のカッパ係数を算出した。その結果、 $\kappa = 0.67$ という値が得られた(表 2)。

表2 回答者のスポーツ観戦行動の変容ステージの一致率(T1-T2, 研究1)

		T2					合計
		前熟考期	熟考期	準備期	実行期	維持期	
T1	前熟考期	60	4	2	1	0	67
	熟考期	8	29	4	0	1	42
	準備期	1	14	30	0	1	46
	実行期	0	0	1	1	0	2
	維持期	0	0	1	0	8	9
	合計	69	47	38	2	10	166

$\kappa = 0.67$

Ⅲ. 研究 2

1. 方法

1. 1 調査対象者と調査手続き

A 市在住の 20 歳以上 70 歳未満(2010 年 4 月時点)の個人を対象に標本調査を行った。住民基本台帳より、性、年代、居住区によって層化無作為抽出した 5,000 名を対象に、質問紙郵送法を用いて調査を実施した。回収期間は 2011 年 1 月 25 日～2 月 24 日とした。回収結果は、配布数 5,000 通から配達不能等 132 通を除く 4,868 通の実配布数に対し、1,779 通を回収した(回収率 36.5%)。また、解析対象とする設問についての回答に不備のあった調査票を除外した結果、有効回答数は 1,650 通となった(有効回答率 33.9%)。

1. 2 調査内容

1. 2. 1 スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度

研究 1 で作成したスポーツ観戦行動の変容ステージ尺度を用いた。

1. 2. 2 スポーツ観戦行動指標

スポーツ観戦行動指標として、過去 1 年間のスポーツ観戦、今後のスポーツ観戦意図を評価した。先行研究において妥当性の確認をするために、運動行動では変容ステージと自己報告された実践水準との関係について検討し¹⁶⁾、果物摂取行動では変容ステージと食料摂取頻度調査項目および今後の果物の摂取意図の関連が検討されている¹⁷⁾。また、観戦意図は観戦行動を予測する際の媒介変数であると定義されている¹⁸⁾。よって、本研究

では過去 1 年間のスポーツ観戦回数およびスポーツ観戦意図を評価し、変容ステージとの関連を検討することにした。過去 1 年間のスポーツ観戦回数については、はじめに過去 1 年間の観戦経験の有無を回答した後、それぞれのリーグにおいて、過去 1 年間の観戦回数を回答するよう求めた。一方、今後のスポーツ観戦意図については、「あなたは今後、スポーツ観戦をしたいと思いますか」の設問に対し、「まったく思わない」から「非常に思う」の 4 段階で評定した。

1. 2. 3 人口統計学的変数

性別、年齢、就業形態の 3 変数について調査した。

1. 3 統計解析

スポーツ観戦行動の変容ステージに及ぼす人口統計学的変数の影響を検討するために、変数が連続変量(年齢)の場合は分散分析、離散変量(性別、就業)の場合には χ^2 検定を行った。

次に、スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度の妥当性を検討するため、過去 1 年間のスポーツ観戦回数と今後のスポーツ観戦意図を従属変数、スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度を独立変数とし、共変量に性別、年齢、就業形態を用いた共分散分析を行った。過去 1 年間のスポーツ観戦回数は、各リーグの観戦回数の総数とし、観戦経験のない回答者の観戦回数は 0 とした。

有意水準を 5%とし、多変量検定が有意であった場合は、各項目の値について変容ステ

ージを独立変数とする一要因の分散分析を行い、効果サイズ(η^2)を算出するとともに、**Tukey** 法を用いた多重比較を行った。効果サイズとは、従属変数に関して独立変数によって説明される分散の割合(影響力)のことであり、その値の解釈は **Cohen**¹⁹⁾の定義にしたがって、小さい(>.01) , 中程度(>.06) , 大きい(>.14)とした。統計解析には、IBM SPSS Statistics18 を使用した。

2. 結果

2. 1 解析対象者の特性

解析対象者の特性は、表3に示したとおりである。スポーツ観戦の行動変容段階ステージの分布は、前熟考期 43.8%、熟考期 33.2%、準備期 15.3%、実行期 0.8%、維持期 7.0% となった。属性は、男性が 42.2%、女性が 57.3%であり、平均年齢は 45.7 ± 12.7 歳であった。2010年4月1日時点のA市住民基本台帳における20歳以上70歳未満の性別の割合は、男性が 51.5%、女性が 48.5%、平均年齢は 43.4 歳であった。就労状況は、フルタイム勤務者が 55.5%であった。

スポーツ観戦行動の変容ステージに及ぼす人口統計学的変数の影響については、年齢、性別、就業形態に有意な影響が認められた[年齢; $F(4/1645)=3.72$, $p<.05$, $\eta^2=.01$, 性別; $\chi^2(4)=61.8$, $p<.001$, 就業形態; $\chi^2(4)=55.6$, $p<.001$]。

表3 解析対象者の特徴(研究2)																
	スポーツ観戦行動の変容ステージ (N=1,650)										χ ² 検定	分散分析				
	前熟考期		熟考期		準備期		実行期		維持期			全体		F値	多重比較 [Tukey]	効果サイズ [η ²]
N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%			
全体	723	43.8	547	33.2	252	15.3	13	0.8	115	7.0	1650	100.0				
性別																
男性	239	34.3	241	34.6	138	19.8	8	1.1	71	10.2	697	42.2	61.8***			
女性	484	50.8	306	32.1	114	12.0	5	0.5	44	4.6	953	57.8				
就業																
フルタイムなし	401	52.2	240	31.3	91	11.8	6	0.8	30	3.9	768	46.5	55.6***			
フルタイムあり	322	36.5	307	34.8	161	18.3	7	0.8	85	9.6	882	53.5				
年齢																
20-29歳	70	9.7	55	10.1	31	12.3	3	23.1	13	11.3	172	10.4				
30-39歳	195	27.0	121	22.1	58	23.0	4	30.8	40	34.3	418	25.3	3.72*	PC, C>M	0.01	
40-49歳	173	23.9	138	25.2	74	29.4	4	30.8	31	27.0	420	25.5				
50-59歳	134	18.5	124	22.7	44	17.5	0	0.0	20	17.4	322	19.5				
60-69歳	151	20.9	109	19.9	45	17.9	2	15.4	11	9.6	318	19.3				
平均値(SD)	45.8 (12.8)		46.8 (13.0)		45.0 (12.0)		39.6 (14.4)		42.5 (11.2)		45.7 (12.7)					

*** $p<.001$, * $p<.01$

PC=Precontemplation(前熟考期)、C=Contemplation(熟考期)、PR=Preparation(準備期)、A=Action(実行期)、M=Maintenance(維持期)

2. 2 スポーツ観戦行動の変容ステージとスポーツ観戦行動指標との関連

スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度の妥当性を検討するため、過去1年間のスポーツ観戦回数、今後のスポーツ観戦意図それぞれを従属変数、スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度を独立変数とし、共変量に性別、年齢、就業形態を用いた共分散分析を行った。結果を表4に示す。共分散分析の結果、過去1年間のスポーツ観戦回数、今後のスポーツ観戦意図の両項目において、有意な差がみられた[過去1年間のスポーツ観戦回数, $F(7/1642)=231.7, p<.001, \eta^2=0.50$; 今後のスポーツ観戦意図, $F(7/1642)=182.9, p<.001, \eta^2=0.44$]。

過去1年間のスポーツ観戦回数をスポーツ観戦行動の変容ステージ尺度別にみたところ、前熟考期：熟考期と、準備期：実行期：維持期の間にそれぞれ有意な差がみられた。今後のスポーツ観戦意図においては、準備期と実行期、実行期と維持期の間に有意な差はみられなかったが、それ以外のステージにおいては有意な差がみられた。

表4 スポーツ観戦行動の変容ステージによる、過去1年間のスポーツ観戦回数と今後のスポーツ観戦意図

	スポーツ観戦行動の変容ステージ					分散分析		
	前熟考期 n=723	熟考期 n=547	準備期 n=252	実行期 n=13	維持期 n=115	F値	多重比較 [Tukey]	効果サイズ [η^2]
過去1年間の スポーツ観戦回数	0.06 (0.10)	0.28 (0.11)	1.99 (0.17)	5.97 (0.74)	10.23 (0.25)	231.7***	PC,C<PR<A<M	0.50
今後のスポーツ観戦意図	2.30 (0.02)	3.24 (0.03)	3.41 (0.04)	3.63 (0.17)	3.72 (0.06)	182.9***	PC<C,PR,A,M; C<PR,M; PR<M	0.44

数値は平均値(SD), *** $p<.001$

PC=Precontemplation(前熟考期)、C=Contemplation(熟考期)、PR=Preparation(準備期)、A=Action(実行期)、M=Maintenance(維持期)

IV. 考察

本研究の目的は、スポーツ観戦者を増加させる支援方策を検討する研究の枠組みとして、TTM を応用し球技系トップリーグを対象としたスポーツ観戦行動を対象として作成したスポーツ観戦行動の変容ステージ尺度の適用可能性を検討することであった。そのため、研究 1 ではその信頼性、研究 2 では妥当性の検討を行った。

研究 1 の尺度の信頼性に関して、検査・再検査間の信頼係数を算出したところ、 $\kappa = .67$ という数値が得られた。Landis, Koch²⁰⁾によると、 κ 係数の判定基準は、1.0~0.8(ほぼ完全に一致している)、0.8~0.6(十分に一致している)、0.6~0.4(ある程度一致している)、0.4~0.2(平均的に一致している)、0.0~ -1.0 (ほとんど一致していない)となっている。したがって、本研究から得られた κ 係数の値は、十分に一致しているという基準を満たしていることが明らかになった。本研究で得られた値は安定性の次元に関する信頼性はある程度確保されていると考えられる。

研究 2 では、スポーツ観戦行動の変容ステージが後期になるにつれて、自己報告されたスポーツ観戦回数、今後のスポーツ観戦意図は増加していた。本研究では、行動変容ステージの持つ性質である過去および現在における実際の行動について、過去 1 年間のスポーツ観戦回数の項目を実践水準として用い、スポーツ観戦行動の変容ステージによってその水準に差異があることが認められた。なお、本研究で前熟考期、熟考期と回答した対象者の中には、過去 1 年間のスポーツ観戦実施者も含まれている。これは、先行研究で用いられてきた「定期的」の定義¹⁶⁾¹⁷⁾よりも期間が長期である点や、調査を実施した時期が回答者によって観戦しているリーグのシーズンオフの期間であったため、「現在スポーツ観戦を

していない」と判断した可能性が考えられる。また、行動の準備性(レディネス)について、今後のスポーツ観戦意図を用いて妥当性の検討を行ったところ、前熟考期とそれ以降のステージ間に有意な差が認められた。よって、この結果は、本研究で用いた尺度の基準関連妥当性の一部が証明されたことを示しており、球技系トップリーグを対象としたスポーツ観戦行動の変容ステージを測定する有用な尺度とみなすことができる。また、Mullin⁵⁾の消費者エスカレーターモデルが観戦頻度で消費者を分類し、一段ずつ階段を上らせようとするモデルであったが、観戦行動の変容ステージにおいても観戦頻度が行動の変容過程を示す一つの基準となっている。よって、主に健康行動科学分野で応用されてきた行動変容ステージ尺度が、スポーツ観戦行動の変容ステージを分類することに応用できることが明らかになった。

一方、実行期については、全体の 0.8%と非常に小さな集団であった。変容ステージでは、実行期と維持期を区別する理由として、「定期的な健康行動を始めてもなかなか継続できない人も多い」という問題意識¹¹⁾があるが、本研究で得られたデータから「定期的なスポーツ観戦を始めたが、継続できない人」は稀であり、実行期から維持期への移行がスポーツ観戦を考える上で重要な問題点ではないことが示唆される。よって、実行期を敢えて維持期と区別することの意義や必要性は弱く、実行期と維持期をひとつのステージとすることも考えられる。

本研究の限界点として、今後、この分野の研究をさらに発展させるためには、以下の点に留意して研究を進めていく必要がある。まず、本研究は横断研究であり、スポーツ観戦行動の変容ステージの移行と過去 1 年間のスポーツ観戦回数、今後のスポーツ観戦意図の

変化との対応をみることによって妥当性を検討した縦断研究ではない。また、スポーツ観戦について、スポーツ観戦者を対象とした評価尺度ではなく、スポーツ観戦未実践者を含んだ評価表によって、スポーツ観戦行動の変容ステージとの関連性を検討することで、より高い妥当性を検討することが可能となるだろう。さらに、本研究では 11 リーグを観戦対象としたが、各リーグによって観戦者の人口統計学的変数をはじめとする特性は異なるため⁹⁾、今後各リーグを対象とした研究がより現場でのスポーツ観戦行動を分類する枠組みとして応用可能になると考える。

V. まとめ

本研究で得られた知見は、主に健康行動に応用されてきた **TTM** の中心的構成要素である「行動の変容ステージ」が球技系トップリーグを対象としたスポーツ観戦行動にも適用可能であり、信頼性と一部の妥当性を満たす尺度であった点である。このことは、スポーツ観戦者を増加させる上で実用的な枠組みになると思われる。

スポーツ立国戦略で課題とされる、スポーツ観戦環境の整備を行うためには、既にスポーツ観戦を行っている人はもちろん、スポーツ観戦を行っていない人にも目を向け、その特性を把握し、きっかけを作ることが重要だと考えられる。その中でも、トップアスリート等を活用した魅力あるスポーツサービスの提供を施策として挙げているように、トップアスリートと接することによって、スポーツ参加意欲だけでなくスポーツ観戦につなげていく取り組みが必要とされる。先行研究では、行動変容ステージを用い、身体活動・運動行動¹²⁾¹³⁾や果物摂取行動¹⁴⁾、禁煙行動¹⁵⁾、脂肪摂取行動²¹⁾など様々な行動に関して、プログラムや情報の介入を通じて前熟考期から熟考期以上の上位ステージに移行すると報告されている。さらには、各ステージによって上位のステージ移行させるための効果的な方策は異なるとされており、検討が続けられている²²⁾。以上のことを踏まえ、今後研究を進めていく上で、スポーツ観戦者、未実施者について、より上位のステージに移行させるための要因や効果的なアプローチの仕方について研究を重ねていく必要がある。

第2部

球技系トップリーグを対象としたスポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度

一尺度の信頼性および妥当性の検討 -

I. 緒言

近年のスポーツ観戦者の動向をみると、Jリーグにおいては観客数の顕著な増加は確認されていないと報告¹⁾されている一方で、1年間の平均観戦頻度が増加傾向にある²⁾ことがわかる。これは、リピーター獲得には成功しているものの、新規の顧客を獲得できていないという現状が浮かび上がる。笹川スポーツ財団の調査³⁾によると、過去1年間のスポーツ観戦経験者33.5%に対して、新規観戦希望者は39.3%であることが報告されていることから、リピーターの確保に加え、新規観戦希望者のスポーツ観戦を促進することが今後の課題の一つとなる。よって現在、既存観戦者を対象に積み重ねられている研究に加え、今後マーケットを拡大していくためには、既存の観戦者と潜在的な観戦者とのスポーツ観戦行動に影響する心理的な要因の違いを明らかにする必要がある。

人々の行動を促進させる方法として、近年、行動科学を用いた手法が注目されている。その中でも Prochaska⁴⁾のトランスセオレティカル・モデル(Transtheoretical Model; 以後、TTM)にしたがって、ある行動を採用し継続するように行動が変容すれば、TTMの中心的構成要素である行動変容ステージに伴って、行動変容の過程、意思決定のバランスおよびセルフ・エフィカシーが変化することが明らかにされている⁵⁻⁷⁾。意思決定バランスとは、行動を変容することに伴う種々の恩恵と負担に対する評価のバランスのこと⁸⁾であ

り、特に、初期の 3 段階(前熟考期、熟考期、準備期)で意思決定のバランスがステージ移行の予測因子となる⁹⁾ことが示唆されている。

一方で、スポーツ観戦行動の分野においては、試合会場に訪れた観戦者に対する観戦動機¹⁰⁾¹¹⁾や、子どもを持つ母親を対象としたスポーツ観戦の阻害要因¹²⁾など限定された対象者に調査が行われており、観戦の実施・未実施に関わらず促進要因・阻害要因を評価する一般的な尺度がないのが現状である。

そこで本研究では、スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度を開発し、前述した課題を解決するために、第 1 部の研究 1、2 において信頼性と一部妥当性が認められた球技系トップリーグを対象としたスポーツ観戦行動の変容ステージ尺度を用い、ステージの違いによる促進要因・阻害要因得点との関連を明らかにすることを目的とする。

本研究におけるスポーツ観戦とは、第 1 部の研究 1、2 同様に、テレビ観戦を含まず、直接試合会場に足を運んで観戦することとした。観戦対象は入場にあたって有料チケットが必要である、かつ毎年シーズンで試合を開催しているリーグとし、プロ野球、J リーグ(サッカー)、V リーグ(バレーボール)、bj リーグ(バスケットボール)、JBL(バスケットボール)、WJBL(バスケットボール)、X リーグ(アメリカンフットボール)、トップリーグ(ラグビー)、F リーグ(フットサル)、アジアリーグ(アイスホッケー)、日本リーグ(ハンドボール)の 11 リーグとした。

Ⅱ. 予備調査

1. 方法

1. 1 調査対象者と手続き

スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因項目を作成するために、事前に予備調査として、便宜的に抽出した大学生および大学院生、計 20 名を対象に半構造化インタビューを実施した。20 名の内訳は、「スポーツ観戦に行く」と回答した 10 名(A 群) , 「スポーツ観戦に行かない」と回答した 10 名(B 群)とした。

1. 2 調査内容

青木¹³⁾は恩恵と負担に参加・不参加理由等を含めた意思決定のバランスとして、促進要因と阻害要因を調査に用いている。よって、調査内容は、A 群に「スポーツ観戦に行く目的・理由は何ですか」、A, B 両群に「スポーツ観戦に行かない、または行けない理由は何ですか」の設問について回答を求めた。

1. 3 統計解析

インタビュー調査で得た内容を基に、逐語録を作成した。分析にあたっては、スポーツビジネスを専攻する大学院生 2 名により、逐語録からスポーツ観戦に影響を及ぼしていると考えられる要因の抽出を行った。その後、スポーツ観戦動機尺度¹⁴⁾やスポーツ観戦行動の意思決定要因尺度¹⁵⁾ , また運動行動において信頼性・妥当性の確認された運動習慣の促進要因・阻害要因尺度¹⁶⁾を考慮し、スポーツビジネスを専門とする専門家 1 名と協議を

行った。具体的には、スポーツ観戦において重要と思われる内容の網羅性の検討、質問文の表現の検討を行った。また、スポーツ観戦実施・未実施の経験に関わらず質問項目の状況がイメージでき、容易に回答できることを意図し、作成を行った。以上の手続きを経た結果、スポーツ観戦に影響を及ぼしていると考えられる促進要因・阻害要因各 18 項目を、プレ調査の測定項目として採用した。

Ⅲ. プレ調査

1. 方法

1. 1 調査対象者と手続き

本調査前に、項目の構成やワーディングを確認するために、インターネット調査を用い、プレ調査を行った。対象者は、既存の社会調査会社に登録する 20 歳以上 70 歳未満のモニターとし、平成 17 年の国勢調査の人口比率と均等比率になるように層化した上で抽出した 205 名とした。調査は、2010 年 11 月に実施した。

1. 2 調査項目

調査項目は、予備調査で得られた各 18 項目を設定した。それぞれの項目には、「まったく思わない」から「非常に思う」の 5 段階で評価した。

1. 3 統計解析

分析方法は、共通する潜在的因子を導き出すため、探索的因子分析を行った。その後、探索的因子分析によって想定された仮説モデルに対して確認的因子分析を行った。統計解析パッケージは IBM SPSS Statistics18 および Amos19 を使用した。

2. 結果

各 18 項目において、因子負荷量 0.4 以上を基準として探索的因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行った結果を基に、共分散構造分析を行ったが、受容できる値とならなかった。想定したモデルを基に共分散構造分析を行った結果も、モデル適合度は十分に受容できる値にならなかった。そのため、再度協議を重ね、想定されるモデルにおける各因子内において、最も内部相関の低い項目を削除した結果、各 10 項目 5 因子でのモデル適合度において、基準を満たす値となった。以上の結果から、促進要因・阻害要因各 10 項目を採用し、本調査において再度信頼性、妥当性を検討することとした。

IV. 本調査

1. 方法

1. 1 調査対象者と調査手続き

A 市在住の 20 歳以上 70 歳未満（2010 年 4 月時点）の個人を対象に標本調査を行った。住民基本台帳より，性，年代，居住区によって層化無作為抽出した 5,000 名を対象に，質問紙郵送法を用いて調査を実施した。回収期間は，2011 年 1 月 25 日～2 月 24 日とした。回収結果は，配布数 5,000 通から配達不能等 132 通を除く 4,868 通の実配布数に対し，1,779 通を回収した(回収率 36.5%)。また，解析対象とする設問についての回答に不備のあった調査票を除外した結果，有効回答数は 1,386 通となった(有効回答率 28.5%)。

1. 2 調査内容

スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因を測定する項目として，予備調査，プレ調査の結果を基に，再度協議を重ね，検討した。その結果，以下の促進要因・阻害要因各 10 項目を採用した。促進要因として，①ストレス解消になる，②気分転換になる，③会場での一体感を味わえる，④特別な雰囲気を感じる，⑤友人と一緒に観戦できる，⑥交友関係が深まる，⑦好きなチームを応援できる，⑧好きな選手を見ることができる，⑨迫力がある，⑩臨場感が伝わる。阻害要因として，①スポーツ観戦はつまらない，②スポーツ観戦に興味がない，③スポーツ観戦に誘ってくれる人がいない，④一緒にスポーツ観戦する人がいない，⑤スケジュールが合わない，⑥スポーツ観戦する十分な時間がない，⑦会場が遠い，⑧アクセスが悪い，⑨スポーツ観戦以外のことにお金を使いたい，⑩スポーツ観戦するお

金がもったいない，とした．回答方法は，「まったく思わない」から「非常に思う」の 5 段階で評価した．

さらに第 1 部の研究 1，2 で信頼性と一部妥当性が確認された球技系トップリーグを対象としたスポーツ観戦行動の行動変容ステージ尺度を用いた．各項目の内容は，「私は現在，スポーツ観戦をしていない．また，これから先(1 年以内)も観戦するつもりはない；前熟考期」「私は現在，スポーツ観戦をしていない．しかし，近い将来(1 年以内)に観戦しようとは思っている；熟考期」「私は現在，スポーツ観戦をしている．しかし，定期的な観戦ではない；準備期」「私は現在，スポーツ観戦をしている．しかし，始めてからまだ間もない(1 年以内)；実行期」「私は現在，定期的にスポーツ観戦をしている．また，長期(1 年以上)にわたって観戦している；維持期」である．なお，ここでの定期的の定義は，「シーズン中において，3 ヶ月に 1 回以上観戦すること」とした．本研究においては，回答者をスポーツ観戦に行っておらず，今後も行かずつもりがない「無関心者(前熟考期)」，スポーツ観戦には行っていないが，今後行く意図がある「潜在観戦者(熟考期)」，スポーツ観戦に行っている「観戦者(準備期，実行期，維持期)」に再分類し，分析を行った．

個人属性項目は，性別，年齢，就労状況について調査した．

1. 3 統計解析

分析方法は，共通する潜在的因子を導き出すため，探索的因子分析を行った．その後，探索的因子分析によって想定された仮説モデルに対して確認的因子分析を行った．次に，確認的因子分析で妥当性が確認されたスポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度を従属

変数，スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度を独立変数，性別・年齢を共変量とする共分散分析を行った．統計解析パッケージは IBM SPSS Statistics18 および Amos19 を使用した．

2. 結果

2. 1 対象者の属性

回答者の属性を表 1 に示した。
性別は、男性が 40.4%，女性が 59.6%であり、平均年齢は 44.9 歳であった。2010 年 4 月 1 日時点の A 市住民基本台帳における 20 歳以上 70 歳未満の性別の割合は、男性が 51.5%，女性が 48.5%，平均年齢は 43.4 歳であった。

表1 対象者の属性

		度数	%
【性別】	男性	562	40.4%
	女性	829	59.6%
【年齢】	20-29歳	153	11.0%
	30-39歳	375	27.0%
	40-49歳	355	25.5%
	50-59歳	275	19.8%
	60-69歳	233	16.8%
	平均	44.9歳	
【就労状況】	自営業	105	7.5%
	勤め人(フルタイム)	638	45.9%
	勤め人(パート、アルバイト)	233	16.8%
	主婦・主夫(家事事業)	288	20.7%
	学生	29	2.1%
	無職(収入が年金のみの方を含む)	98	7.0%

2. 2 スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度の開発

スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因を測定する項目の正規性を確認するため、各項目の平均値(標準偏差)を算出した。それぞれ、促進要因①3.5(1.0)，②3.9(0.8)，③4.0(0.9)，④3.9(0.8)，⑤3.6(0.9)，⑥3.2(0.9)，⑦3.9(0.9)，⑧4.0(0.9)，⑨4.2(0.8)，⑩4.3(0.8)，阻害要因①2.2(0.9)，②2.4(1.1)，③3.1(1.1)，④2.9(1.1)，⑤3.5(1.1)，⑥3.5(1.1)，⑦3.4(1.0)，⑧3.1(1.0)，⑨3.3(1.1)，⑩2.8(1.1)となった。天井効果と床(フロア)効果の検討を行い、天井効果は平均値に標準偏差を加えた得点が上限値(5 点)以上、床効果は平均値から標準偏差を減じた下限値(1 点)以下¹⁷⁾を基準とし、算出した。床効果はみられなかったが、天井効果は 2 項目みられた。研究目的によっては、天井効果や床効果のみられる

項目を含める¹⁷⁾と指摘されていることから、本研究ではスポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因を測定する上で必要な項目であると判断し、すべての項目を用い分析を行った。

各 10 項目を用い、因子負荷量 0.4 以上を基準として探索的因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った結果、促進要因・阻害要因ともに 10 項目 5 因子(各因子: 2 項目)となった(表 2)。

表2 スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因項目に関する探索的因子分析結果

	項目	累積寄与率	因子負荷量	Cronbach's α
促進要因	第1因子(ライブ効果)			
	臨場感が伝わる	16.5	.790	.895
	迫力がある		.781	
	第2因子(ファン)			
	好きなチームを応援できる	32.4	.788	.885
	好きな選手を見ることができる		.787	
	第3因子(気晴らし)			
	ストレス解消になる	47.5	.775	.818
	気分転換になる		.760	
	第4因子(交流)			
阻害要因	友人と一緒に観戦できる	61.2	.729	.766
	交友関係が深まる		.728	
	第5因子(ムード)			
	特別な雰囲気を感じる	71.6	.627	.769
	会場での一体感を味わえる		.585	
	第1因子(無関心)			
	スポーツ観戦はつまらない	16.3	.868	.883
	スポーツ観戦に興味がない		.775	
	第2因子(物理的環境)			
	会場が遠い	32.1	.871	.879
	アクセスが悪い		.836	
	第3因子(社会的支援の欠如)			
	スポーツ観戦する人がいない	47.6	.854	.860
	スポーツ観戦に誘ってくれる人がいない		.822	
	第4因子(金銭的価値)			
	スポーツ観戦以外ことにお金を使いたい	62.1	.810	.844
	スポーツ観戦するお金がもったいない		.738	
	第5因子(時間の管理)			
	スケジュールが合わない	76.3	.819	.817
	スポーツ観戦する十分な時間がない		.798	

因子名は、促進要因において第 1 因子を「ライブ効果」、第 2 因子を「ファン」、第 3 因

子を「気晴らし」、第 4 因子を「交流」、第 5 因子を「ムード」とした。阻害要因において、第 1 因子を「無関心」、第 2 因子を「物理的環境」、第 3 因子を「社会的支援の欠如」、第 4 因子を「金銭的価値」、第 5 因子を「時間の管理」とした。促進要因・阻害要因各 10 項目で尺度の信頼性について、検討を行うため Cronbach の α 係数を算出した結果、いずれの因子においても 0.75 以上となりとなり、信頼性は高いと判断することができた。

尺度の妥当性について検討するため、確認的因子分析を行った。適合度の指標は、Goodness of Fit Index(GFI) , Adjusted Goodness of Fit Index(AGFI) , Comparative Fit Index(CFI) , Root Mean Square Error of Approximation(RESEM)の 4 つを使用した。GFI, AGFI, CFI はそれぞれ 0–1 の値をとるが、モデルが適合するためには、値が 1 に近いほど説明力のあるモデルとされ、0.9 以上が判断基準とされる¹⁸⁾¹⁹⁾。GFI に比べて、AGFI が著しく低下するモデルはあまり好ましくないとされている¹⁹⁾。RESEM は 0 に近いほどよいモデルであると判断され、0.08 以下でモデルが採択される²⁰⁾。 χ^2 検定による適合度の判定は、ケース数に強く依存していると指摘されるため²⁰⁾、本研究では指標として用いなかった。以上の指標を基準とした結果、促進要因・阻害要因ともに 10 項目 5 因子でのモデル適合度において基準を満たす値(促進要因: GFI=.987, AGFI=.972, CFI=.992, RMSEA=.043, 阻害要因: GFI=.977, AGFI=.949, CFI=.980, RMSEA=.065)になった(図 1, 図 2)。

以上の結果から、本研究で開発したスポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度が十分な構成概念妥当性を有することが確認された。

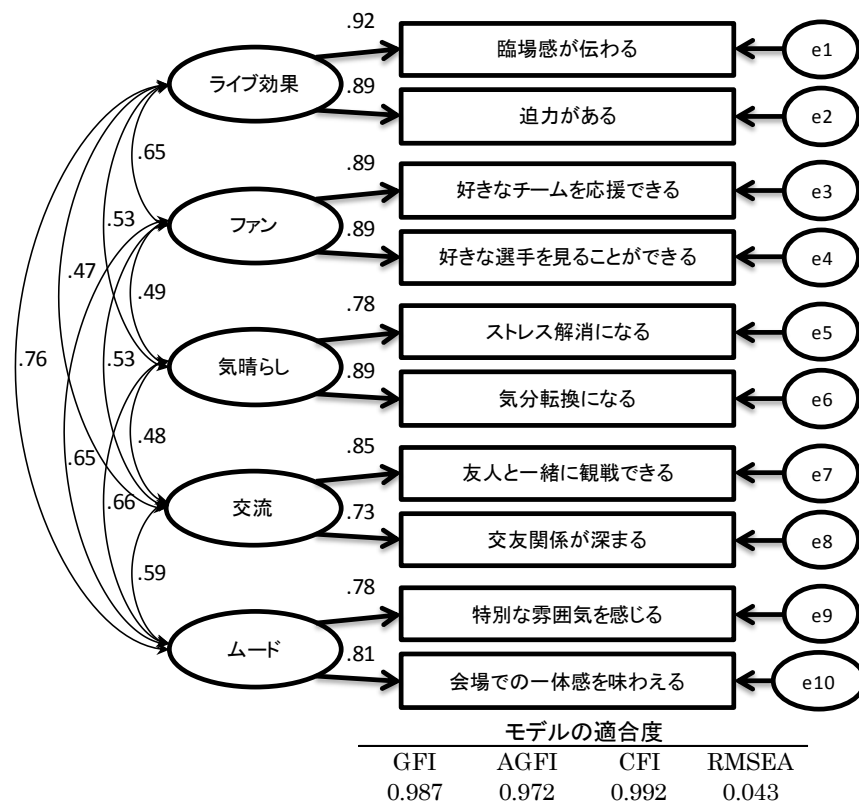


図 1 スポーツ観戦行動の促進要因の測定項目に関する確認的因子分析結果

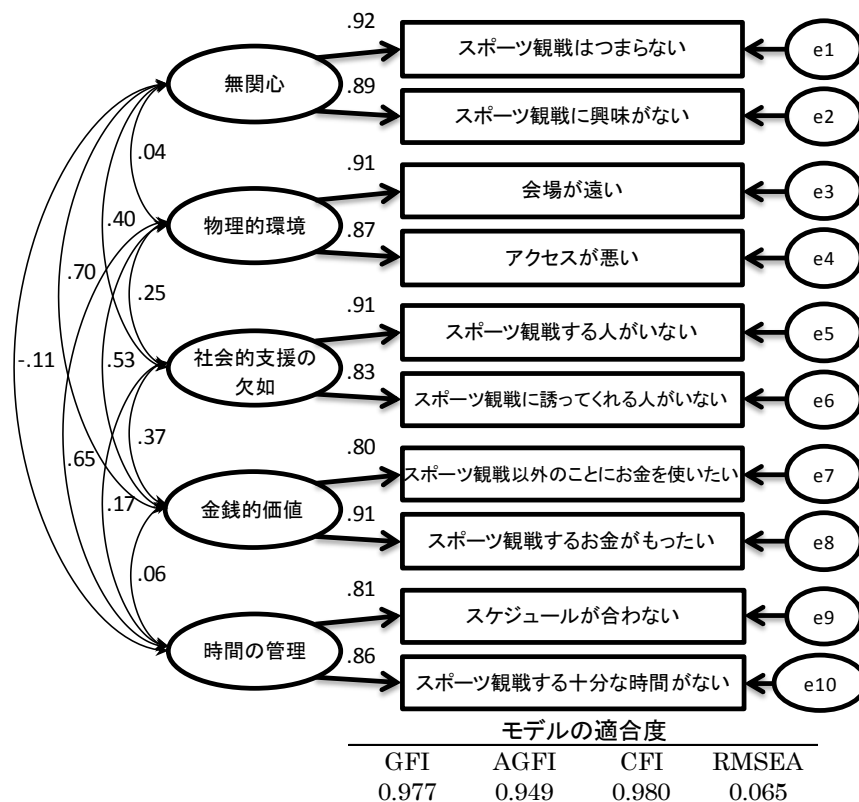


図 2 スポーツ観戦行動の阻害要因の測定項目に関する確認的因子分析結果

2. 3 スポーツ観戦行動の変容ステージと促進要因・阻害要因の関連

スポーツ観戦行動の変容ステージの分布は、無関心者 667 名(48.0%)、潜在観戦者 484 名(34.8%)、観戦者 240 名(17.3%)となった。

本研究では、はじめにスポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度の促進要因・阻害要因内項目の得点を逆転項目とした上で単純加算し、尺度得点(5-50 点)とした。スポーツ観戦行動の変容ステージと、促進要因・阻害要因尺度の関係について検討するため、促進要因・阻害要因得点それぞれの得点を従属変数、行動変容ステージ尺度を独立変数、性別・年齢を共変量とする共分散分析を行った。結果、表 3 のとおり、促進要因得点において無関心者よりも潜在観戦者、観戦者が有意に高く、阻害要因得点においてステージが上位になるにつれて有意に低くなることが明らかになった[促進要因, $F(4/1386)=63.8$, $p<.001$, $\eta^2=0.16$; 阻害要因, $F(4/1386)=81.2$, $p<.001$, $\eta^2=0.19$]。

表3 スポーツ観戦行動の変容段階ステージによる、過去1年間のスポーツ観戦回数と今後のスポーツ観戦意図

	スポーツ観戦行動の変容ステージ			分散分析		
	無関心者 n=667	潜在観戦者 n=484	観戦者 n=240	F値	多重比較 [Tukey]	効果サイズ [η^2]
促進要因	3.62 (0.02)	4.04 (0.03)	4.15 (0.04)	63.8***	NP<P,S	0.16
阻害要因	3.27 (0.02)	2.88 (0.02)	2.61 (0.04)	81.2***	NP>P>S	0.19

数値は平均値(SD), *** $p<.001$

NP=Non-potential(無関心者)、P=Potential(潜在観戦者)、S=Spectator(観戦者)

その後、スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度の各因子内項目の得点を逆転項目として単純加算し、尺度得点(各因子ともに 2-10 点)とし、同様に、促進要因・阻害要因尺度各因子それぞれの得点を従属変数、行動変容ステージ尺度を独立変数、性別・年齢を共変量とする共分散分析を行った。その結果を表 4 に示す。

表4 スポーツ観戦行動の変容段階ステージによる、過去1年間のスポーツ観戦回数と今後のスポーツ観戦意図

	スポーツ観戦行動の変容ステージ			分散分析		
	無関心者 n=667	潜在観戦者 n=484	観戦者 n=240	F値	多重比較 [Tukey]	効果サイズ [η^2]
気晴らし	6.97 (0.06)	7.84 (0.07)	8.10 (0.10)	32.0***	NS<PS,S	0.08
ムード	7.37 (0.06)	8.28 (0.07)	8.67 (0.10)	54.0***	NS<PS<S	0.13
交流	6.46 (0.06)	7.04 (0.07)	7.02 (0.10)	16.5**	NS<PS,S	0.05
ファン	7.36 (0.06)	8.29 (0.07)	8.57 (0.10)	38.4***	NP<PS,S	0.10
ライブ効果	8.00 (0.06)	8.97 (0.07)	9.17 (0.10)	47.4***	NS<PS,S	0.12
無関心	5.64 (0.07)	3.80 (0.08)	3.29 (0.11)	127.3***	NP>PS>S	0.27
社会的支援の欠如	6.59 (0.08)	5.83 (0.09)	5.04 (0.13)	33.9***	NP>PS>S	0.09
時間の管理	6.89 (0.08)	7.30 (0.09)	6.61 (0.13)	11.5***	NS<PS; PS>S	0.03
物理的環境	6.56 (0.07)	6.45 (0.08)	6.38 (0.12)	0.73 n.s.	—	—
金銭的価値	7.04 (0.07)	5.40 (0.08)	4.77 (0.12)	107.2***	NP>PS>S	0.24

数値は平均値(SD), *** $p<.001$, ** $p<.005$

NP=Non-potential(無関心者)、PS=Potential Spectator(潜在観戦者)、S=Spectator(観戦者)

促進要因では、「気晴らし」「交流」「ファン」「ライブ効果」において、無関心者と潜在観戦者、観戦者で有意な差がみられ、「ムード」において、ステージが上昇するにつれて有意に得点が高い結果となった[気晴らし, $F(4/1386)=32.0$, $p<.001$, $\eta^2=0.08$; ムード, $F(4/1386)=54.0$, $p<.001$, $\eta^2=0.13$; 交流, $F(4/1386)=16.5$, $p<.005$, $\eta^2=0.05$; ファン, $F(4/1386)=38.4$, $p<.001$, $\eta^2=0.10$; ライブ効果, $F(4/1386)=47.4$, $p<.001$, $\eta^2=0.12$] .

阻害要因では、「無関心」「社会的支援の欠如」「時間の管理」「金銭的価値」において、各ステージ間に有意な差がみられたが、「物理的環境」において有意な差がみられなかった[無関心, $F(4/1386)=127.3$, $p<.001$, $\eta^2=0.27$; 社会的支援の欠如, $F(4/1386)=33.9$, $p<.001$, $\eta^2=0.09$; 時間の管理, $F(4/1386)=11.5$, $p<.001$, $\eta^2=0.03$; 物理的環境, $F(4/1386)=0.73$, $p=.574$; 金銭的価値, $F(4/1386)=107.2$, $p<.001$, $\eta^2=0.24$] .

V. 考察

1. 1 スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度の開発

本研究では、スポーツ観戦実施に影響を及ぼす促進要因・阻害要因に着目し、測定尺度の開発を試みるとともに、信頼性・妥当性を検討することを目的とした。

スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度項目を決定するため、尺度の因子構造を検討した結果、促進要因・阻害要因ともに 10 項目 5 因子構造となった。

尺度の信頼性の指標である Cronbach の α 係数を算出した結果、0.75 以上となり十分に高い値を示した。さらに確認的因子分析の結果から、モデル適合度を示す値はすべて受容できる値となり、構成概念妥当性も確認され、本研究で開発した尺度はスポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因を測定する上で、要件を十分に満たしていると考えられる。

1. 2 スポーツ観戦行動の変容ステージと促進要因・阻害要因の関連

スポーツ観戦行動の変容ステージと、促進要因・阻害要因の関係は、促進要因得点において無関心者に対して潜在観戦者、観戦者は有意に高く、阻害要因得点においては無関心者から観戦者へとステージが上位になるにつれて、有意に低い結果となった。Myers²¹⁾は、行動変容のステージが高いほど促進要因の得点は高くなり、阻害要因は低くなると指摘しており、本研究の結果はほぼ一致している。促進要因において、潜在観戦者と観戦者に有意な差が見られなかったのは、スポーツ観戦行動において促進要因よりも阻害要因が強く影響している可能性があると考えられる。

スポーツ観戦行動の変容ステージと各因子得点の関係については、促進要因各因子にお

いて無関心者と潜在観戦者、観戦者の間に有意な差がみられ、「ムード」因子においては潜在観戦者よりも観戦者が有意に高い結果となった。来場回数が多いほど「一体感」に充足を得ている傾向があると報告²²⁾されていることから、潜在観戦者が実際の会場でのムードをイメージしにくく、促進要因と捉えられていないことが考えられる。阻害要因においては「物理的環境」因子において有意な差がみられなかった。これは、スポーツ観戦実施・未実施には、会場までの距離やアクセスの良さは影響していないという結果になる。先行研究ではJリーグのシーズンチケット購買率はホームスタジアムからの距離が離れるほど低下する²³⁾とされているが、本研究では心理的測定項目になることから、各々の心理的距離において差がないと捉えられる可能性がある。また、潜在観戦者においては、「時間の管理」因子の得点において、無関心者、観戦者よりも得点が高かったことから、実際にスポーツ観戦をしようと意図した段階で、スポーツ観戦をするための時間をとることは大変であると強く感じる事が反映されている可能性がある。そのため、スポーツ観戦のための時間を確保するために必要となる要因を、さらに検討することが課題となる。

VI. まとめ

本研究では、スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度を開発し、スポーツ観戦実施と促進要因・阻害要因との関連性を明らかにした。スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度は、各 10 項目 5 因子構造となり、促進要因では「気晴らし」「ムード」「交流」「ファン」「ライブ効果」の 5 因子が抽出され、阻害要因では「無関心」「社会的支援の欠如」「時間の管理」「物理的環境」「金銭的価値」の 5 因子が抽出された。また、スポーツ観戦行動の変容ステージが高いほど促進要因得点が高くなり、阻害要因得点が低くなった。その中でも阻害要因の「物理的環境」においては有意な差がみられず、「時間の管理」においては、潜在観戦者の得点が最も高い結果となったことから、ステージによってスポーツ観戦を阻害する要因が異なることが明らかとなった。

本研究で、作成されたスポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度は、スポーツ観戦実施、未実施に関わらず、心理的な行動規定要因を測定する上で有益な尺度になると思われる。今後、この分野の研究をさらに発展させるためには、以下の点に留意して研究を進めていく必要がある。まず、本研究から得られた知見は横断的研究によるものであり、スポーツ観戦実施と促進要因・阻害要因との因果関係については言及できない。今後は、縦断的研究を行い、スポーツ観戦実施と促進要因・阻害要因の影響を明らかにする必要がある。さらに本研究では、TTM の構成要素である意思決定バランスと行動変容ステージとの関連に着目したが、今後はセルフ・エフィカシーを含めた他の要因を検討した上での包括的な研究が期待される。

引用・参考文献

【第1部】

- 1) 文部科学省；スポーツ立国戦略－スポーツコミュニティ・ニッポン－，2010，
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/09/16/1297203_02.pdf.
- 2) 笹川スポーツ財団；スポーツ白書－スポーツが目指すべき未来－，笹川スポーツ財団（東京），p.32, 2011.
- 3) 笹川スポーツ財団；スポーツライフデータ 2010 スポーツライフに関する調査報告書，笹川スポーツ財団（東京），p.41, 2010.
- 4) 山下秋二，原田宗彦編著，松岡宏高；図解スポーツマネジメント，大修館書店（東京），p.46, 2007.
- 5) Mullin, B.J., et.al. ; Sports marketing (3rd ed.), Human Kinetics, pp.42-44, 2007.
- 6) Wakefield, K. L., Sloan, H. J. ; The effects of team loyalty and selected stadium factors on spectator attendance, Journal of Sports Management, Vol.9(2), pp.153-172, 1995.
- 7) Kwak, D. H., Kang, J. H. ; The effect of self/team follower image congruence on spectator sport consumption behavior and team loyalty, International Journal of Sport and Health Science, Vol.6, pp.135-144, 2008.
- 8) Trail, G., James, J. ; An analysis of the sport fan motivation scale, Journal of Sport Behavior, Vol.24, pp.108-127, 2001.

- 9) 高田一慶, 他; わが国の球技系トップリーグ観戦者に関する研究ークラスター分析を用いた観戦者の分類 -, スポーツ産業学研究, Vol.18(1), pp.25-42, 2008.
- 10) Prochaska, J. O., DiClemente, C. C. ; Stages and processes of self-change of smoking: Toward an integrative model of change, Journal of Consulting and Clinical Psychology, Vol.51(3), pp.390-395, 1983.
- 11) 岡浩一郎; 行動変容のトランスセオレティカル・モデルに基づく運動アドヒレンス研究の動向, 体育学研究, Vol.45(4), pp.543-561, 2000.
- 12) 原田和弘, 他; 運動無関心者の心理的準備性の変化と趣味・余暇活動との関連, スポーツ産業学研究, Vol.20(2), pp.199-209, 2010.
- 13) 片山祐実, 他 ; 趣味・余暇活動への興味を高めることを意図した介入が運動無関心者の心理的準備性に及ぼす効果, スポーツ産業学研究, Vol.21(1), pp.27-39, 2011.
- 14) de Vet. E., et. al. ; Determinants of forward stage transition from precontemplation and contemplation for fruit consumption, American Journal of Health Promotion, Vol.19(4), pp.278-285, 2005.
- 15) Etter, J. F., Perneger, T. V. ; Associations between the stages of change and the pros and cons of smoking in a longitudinal study of Swiss smokers, Addictive Behaviors, Vol.24(3), pp.419-424, 1999.
- 16) 岡浩一郎; 運動行動の変容段階尺度の信頼性および妥当性ー中高年者を対象にした検討ー, 健康支援, Vol.5(1), pp.15-22, 2003.
- 17) de Vet. E., et. al. ; Comparing stage of change and behavioral intention to

understand fruit intake, Health Education Research, Vol.22(4), pp.599-608, 2007.

18) 原田尚幸, 他; プロ野球本拠地住民の観戦意図に影響を及ぼす要因, 鹿屋体育大学学術研究紀要, Vol.20, pp.65-71, 1998.

19) Cohen J. ; Statistical power analysis for the behavioral sciences, New York: Academic Press, 1977.

20) Landis JR, Koch GG ; The measurement of observer agreement for categorical data Biometrics, Vol.33, pp.159-174, 1977.

21) Wright, J. A., et.al. ; Testing the predictive power of the transtheoretical model of behavior change applied to dietary fat intake, Health Education Research, Vol.24(2), pp.224-236, 2008.

22) Prochaska, J. O., et.al. ; Stages of change and decisional balance for 12 problem behaviors., Health Psychology, Vol.13(1), pp.39-46, 1994.

【第2部】

- 1) 笹川スポーツ財団; スポーツ白書ースポーツが目指すべき未来ー, 笹川スポーツ財団(東京), p.32, 2011.
- 2) 社団法人日本プロサッカーリーグ; Jリーグスタジアム観戦者調査 2010 サマリーレポート, 社団法人日本プロサッカーリーグ, pp.39-44, 2011.
- 3) 笹川スポーツ財団; スポーツライフデータ 2010 - スポーツライフに関する調査報告書 -, 笹川スポーツ財団(東京), p.41, 2010.
- 4) Prochaska, J. O., DiClemente, C. C. ; Stages and processes of self-change of smoking: Toward an integrative model of change, Journal of Consulting and Clinical Psychology, Vol.51(3), pp.390-395, 1983.
- 5) Buxton, K., et.al. ; How applicable is the stages of change model to exercise Behavior? A review, Health Educational Journal, Vol.55, pp.239-257, 1996.
- 6) Reed, G. R., et.al. ; What makes a good standing algorithm: examples from regular exercise, American Journal of Health Promotion, Vol.12, pp.57-66, 1997.
- 7) Burbank, P. M., Riebe, D; Promoting exercise and behavior change in older adults, Springer Publishing Company: New York, pp.29-208, 2002.
- 8) 荒井弘和, 他; 運動行動の変容ステージに対応した体育授業プログラムが大学生の運動習慣に与える効果, 体育学研究, Vol.54, pp.367-379, 2009.
- 9) 岡浩一郎; 行動変容のトランスセオレティカル・モデルに基づく運動アドヒレンス研究の動向, 体育学研究, Vol.45, pp.543-561, 2000.

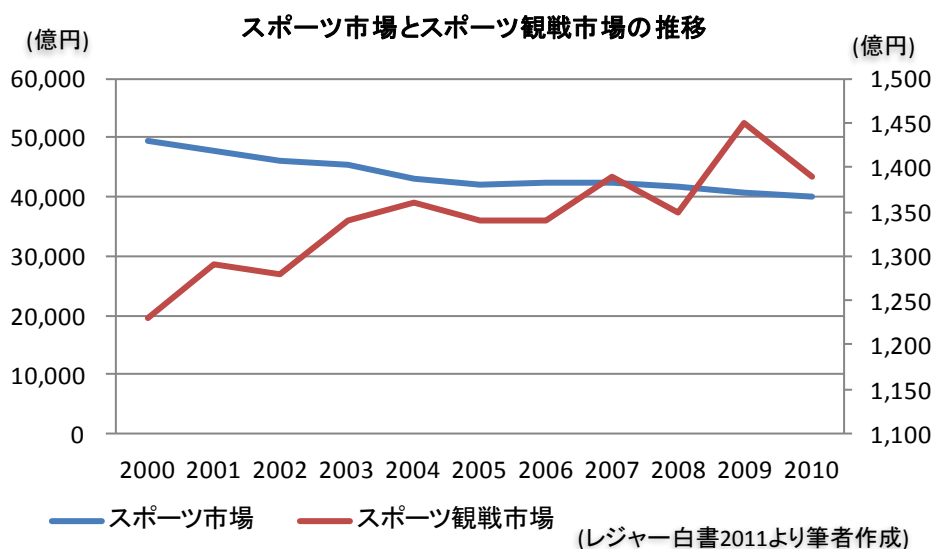
- 10) 高田一慶, 他; わが国の球技系トップリーグ観戦者に関する研究 - クラスタ分析を用いた観戦者の分類 -, スポーツ産業学研究, Vol.18, pp. 25-42, 2008.
- 11) Trail, G., James, J.; An analysis of the sport fan motivation scale; Journal of Sport Behavior, Vol. 24, pp.108-127, 2001.
- 12) 藤本淳也, 他; 女性のスポーツ参与阻害要因に関する研究Ⅱ - 12 歳以下の子供を持つ母親のスポーツ観戦者行動について -, 大阪体育大学紀要, Vol.36, pp.84-94, 2005.
- 13) 青木邦男; 在宅高齢者の運動行動のステージと関連する要因, 体育学研究, Vol.50, pp.13-26, 2005.
- 14) 辻浅夫, 中桐伸吾; スポーツ観戦動機に関する研究 - 観戦動機の構造と測定尺度の作成 -, 研究論叢 Vol.60, pp.209-223, 2002.
- 15) 大友暁子, 清水安夫; スポーツ観戦行動の規定要因に関する研究 - 社会的属性・スポーツ経験・意思決定要因を予測変数とした検討 -, 神奈川体育学会機関紙 体育研究, Vol.42, pp.14-20, 2009.
- 16) 石井香織, 他; 簡易版運動習慣の促進要因・阻害要因尺度の開発, 体力科学, Vol.58, pp.507-516, 2009.
- 17) 小塩真司; SPSS と Amos による心理・調査データ解析 因子分析・共分散構造分析まで, 東京図書, p.129, 2004.
- 18) 豊田秀樹, 他; 原因を探る統計学 共分散構造分析入門, 講談社, p.174, 1992.
- 19) 小塩真司; 研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析, 東京図書, p.267, 2005.

- 20) 山本嘉一郎, 小野寺孝義; Amos による共分散構造分析と解析事例[第 2 番], ナカニシヤ出版, p.17, 1999.
- 21) Myers, R. S., Roth, D. L.; Perceived benefits of and barriers to exercise and stage of exercise adoption in young adults, *Health Psychology*, Vol.16(3), pp.277-283.
- 22) 高橋豪仁; サンフレッチェ広島のホームゲーム観戦回数の要因に関する研究, スポーツ産業学研究, Vol.6(1), pp.7-19, 1996.
- 23) 庄子博人, 他; J リーグシーズンチケット購買率の距離減衰率とその規定要因, スポーツ産業学研究, Vol.19(2), pp.119-127, 2009.

付録1 研究小史

1. スポーツ経営とスポーツ観戦者

近年，わが国のスポーツ市場は4兆円を超える規模で推移しており，その中でもスポーツ観戦市場は1,400億円弱とされ，2000年の1,230億円からの増加が報告されている¹⁾。



多くのスポーツ事業体において，スタジアムを観客で満杯にすることは最重要課題であり²⁾，チケット販売が大きな柱のひとつであるため，安定した観客動員数の確保に努めることが重要である³⁾とされている．プロスポーツはファンに支えられたビジネスであり，人気と実力を兼ね備えたチームであっても，急速なファン離れが起きる可能性がある．併せて，日本のスポーツを支えてきた企業スポーツの休廃部の波が続いており，高田はプロスポーツには存在しない特徴的な属性を持つ球技系トップリーグ観戦者が現在においても将来的にも重要な顧客であると位置づけている⁴⁾．よって，スポーツ観戦者を増加させることは，スポーツチーム運営にとって重要な経営課題であり，様々な視点からその支援策の検討を進める必要がある．武藤は，カスタマー・マーケティングの基本施策として，

1) 底辺を広げること、2) ライトユーザーをヘビーユーザーにすることとしており⁵⁾、いかにスポーツ観戦経験のない人に会場に足を運んでもらうか、いかに一度来場した観戦者に再度会場に足を運んでもらうか、いかにヘビーユーザーを維持するか等が、観戦者増加を図る上で課題となってくる。Jリーグの調査⁶⁾では、J1では1年間に17回以上会場に訪れる観戦者が39.2%、J2では21回以上の来場者が29.8%とヘビーユーザーを獲得できている現状がうかがえる。一方で、笹川スポーツ財団の調査⁷⁾によると、過去1年間のスポーツ観戦経験者33.5%に対して新規観戦希望者は39.3%であることから、既存の観戦者とほぼ同規模のマーケットが存在することが明らかとなっており、新規観戦希望者の観戦を促進することも今後の課題の1つとなってくる。これは、2010年度に文部科学省があらたなスポーツ文化の確立を目指し策定した「スポーツ立国戦略」⁸⁾において、課題の一つとされているスポーツを「観る」人にも着目をし、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことのできる環境の整備にも、重要な役割を果たすと考える。

2. スポーツ観戦行動研究

スポーツ観戦者行動に関する研究は、AIDMA や AISAS⁹⁾など消費者行動のモデルを応用し、展開されている。その中でも、明確な数字である観戦頻度において消費者を分類する Mullin の消費者エスカレーター¹⁰⁾が注目され、観戦者のエスカレーターを上昇させるための研究が数多く行われている。近年の傾向としては、観戦行動（観戦回数や再観戦意図）に影響を与える要因として、チームロイヤルティ³⁾¹¹⁾¹²⁾やチーム・アイデンティフィケーション¹³⁻¹⁵⁾などの社会心理学的変数とともに、観戦動機に着目した研究が積み重ねら

れている。これらの研究は、観戦動機構造の把握と測定尺度の開発を重視しており、Wann の尺度¹⁶⁾を基に改良が重ねられ、Trail& James¹⁷⁾は観戦動機測定尺度(Motivation Scale for Sports Consumption; MSSC)を開発している。国内においても、大友¹⁸⁾がスポーツ観戦行動尺度(Behavioral Scale for Sport-Watching; BSSW)、スポーツ観戦行動の意思決定要因尺度(Division-Making Scale for Spor-Watching Behavior; DMSSWB)の開発を行い、消費行動の特性を把握することに役立つと考えられる。Wann¹⁹⁾によると、スポーツ観戦毎に異なる観戦動機を理解することは、チームの収益と入場料収入を増加させるために重要としている。しかし、前述した研究は、既にスポーツ観戦に足を運んでいる観戦者に対する研究が多く、スポーツ観戦をしていない人との比較を行った研究は散見される程度である。さらには、消費者エスカレーターによる「Nonaware noconsumer」「Aware noconsumer」を判断する基準がなく、人がスポーツ観戦をするようになる過程を想定することはできても、理論的根拠を持って検討し対策することはできない。

3. 行動科学とトランスセオレティカル・モデル

行動科学の分野において、個人がある特定の行動を習慣化していく過程を理解するために、社会的認知理論や行動意図予測理論など、様々な行動科学の理論やモデルが応用されてきた。最近では、喫煙や脂肪分摂取などの不健康な習慣的行動の変容過程の説明に利用されている行動変容のトランスセオレティカル・モデル(Transtheoretical Model; 以後TTM)²⁰⁾が非常に注目され、身体活動や運動といった健康活動を維持・増進する行動変容の過程にも応用されており、これらの行動を変容させるためのステージに応じた介入を行

う際に有効な枠組みを提供するとされている²¹⁾。実際に、TTMの枠組みによって分類された前熟考期群にプログラムや情報を提供することで上位のステージへ移行させることができるが、身体活動・運動行動²²⁾²³⁾や果物摂取行動²⁴⁾、禁煙行動²⁵⁾等の健康行動に関する研究において報告されている。また、行動を促進させるだけではなく、ステージごとの特性を把握することによって、ステージの逆戻りを防ぐ要因の検討や対策にも役立つと考えられる。

3. 1 TTMを用いた研究

TTMは、禁煙、コカイン吸引の停止、減量、脂肪分摂取の制限、青少年の非行防止、安全な性行為、コンドームの利用、日焼け止めの利用、ラドンガス検査、運動習慣の獲得、マンモグラフィー検査および医師の予防的診療行動など、様々な不健康行動・健康行動の変容過程の説明に利用されてきた²⁶⁾²⁷⁾。また、日常的な行動だけでなく、家族の臓器提供²⁸⁾や献血²⁹⁾のように非日常的な行動や、自転車通勤を推奨するイベント³⁰⁾に対する行動を対象とした研究も行われている。

3. 2 TTMの構成要素

TTMの構成要素として、1) 行動変容のステージ(Stages of change)、2) 行動変容の過程(Processes of change)、3) 意思決定のバランス(decisional balance)および4) セルフ・エフィカシー(self-efficacy)が挙げられる²¹⁾。

行動変容のステージは、TTMの中心的構成要素であるとされ、主な特徴は、過去およ

び現在における実際の行動と、その行動に対する動機づけの準備性(レディネス)の両方の性質が統合されていることである。これらのステージは、前熟考期(Precontemplation)、熟考期(Contemplation)、準備期(Preparation)、実行期(Action)および維持期(Maintenance)の5つの段階に分類される。個人が望ましい水準の行動を獲得するためには、これらのステージを直線的に移行していく場合は少なく、何度も逆戻りし、循環的に変容しながら維持期に到達すると仮定されている。

具体的には、「前熟考期」は、予測できる将来には行動を変容する意図がないステージ、「熟考期」は、予測可能な将来に行動変容する意図があるが、実際に現在は行動を変容していないステージ、「準備期」は、今すぐにも行動変容しようという意図があるステージ、あるいは望まし水準ではないが自分なりに行動変容しているステージ、「実行期」は、望ましい水準で行動しているが、行動変容してからまだ間もないステージ、「維持期」は、望ましい水準での行動を長期にわたって継続しているステージである。

行動変容ステージを用いて、行動変容の過程、意思決定バランス、セルフ・エフィカシーとの関連をみると、ステージによってそれぞれの構成要素も変化することが明らかになっている。

3. 3 行動の促進要因・阻害要因

促進要因・阻害要因尺度とは、TTMの構成要素のひとつである意思決定バランスの概念を基に作成された尺度である。

意思決定バランスとは、Janis& Mann(1977)によって提唱された、意思決定理論の主要

な構成要素である 8 つの側面を整理して、行動変容に伴う恩恵(pros; 自己にとっての利益, 重要な他者にとっての利益, 自己の賛成, 重要な他者からの賛成)と負担(cons; 自己にとっての損失, 重要な他者にとっての損失, 自己の反対, 重要な他者の反対)およびそのバランスにまとめている。Prochaska²⁷⁾は、問題視されている喫煙やコカイン吸引等, 12 の行動に対する意思決定バランスの関係を明らかにしている。青木³¹⁾は、意思決定バランスを構成する恩恵と負担に行動の参加・不参加理由等を含めた促進要因・阻害要因尺度を作成し、石井³²⁾は現場で活用可能かつ簡便な簡易版促進要因・阻害要因尺度の開発を行っている。行動変容のステージと意思決定バランスの関係については、特に初期の 3 段階(前熟考期, 熟考期, 準備期)で意思決定のバランスが段階移行の予測因子になることが示唆されている²¹⁾ことから、阻害要因・促進尺度を用いることで、個人および対象グループの特性に応じた対策を行うことが可能となる。

引用参考文献

- 1) 社会経済生産性本部; レジャー白書 2011 進むレジャーのデジタル化, 社会経済戦費成本部: 東京, pp.80-81, 2011.
- 2) 原田宗彦編著, 佐野毅彦著, プロスポーツのマネジメント, 改訂第 2 版, 杏林書店(東京), pp.139-158, 1999.
- 3) 藤本淳也, 他; プロスポーツ観戦回数に影響を及ぼす要因に関する研究 - 特に, プロ野球のチームロイヤルティに注目して -, 大阪体育大学紀要, 第 27 巻, pp.51-62, 1996.
- 4) 高田一慶, 他; わが国の球技系トップリーグ観戦者に関する研究 - クラスタ分析を

用いた観戦者の分類 - , スポーツ産業学研究, Vol.18(1), pp.25-42, 2008.

5) 武藤泰明; プロスポーツクラブのマネジメント - 戦略の策定から実行まで, 東洋経済新報社(東京), p.308, 2006.

6) 社団法人日本プロサッカーリーグ; Jリーグスタジアム観戦者調査 2010 サマリーレポート, 社団法人日本プロサッカーリーグ, pp.39-44, 2011.

7) 笹川スポーツ財団; スポーツライフデータ 2010 スポーツライフに関する調査報告書, 笹川スポーツ財団(東京), p.41, 2010.

8) 文部科学省; スポーツ立国戦略ースポーツコミュニティ・ニッポンー, 2010, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/__icsFiles/afieldfile/2010/09/16/1297203_02.pdf.

9) 山下秋二, 原田宗彦編著, 松岡宏高著; 図解スポーツマネジメント, 大修館書店(東京), p.46, 2007.

10) Mullin, B.J., et.al. ; Sports marketing (3rd ed.), Human Kinetics, pp.42-44, 2007.

11) Wakefield, K. L., Sloan, H.J. ; The effect of team loyalty and selected stadium factors on spectator attendance., Journal of Sports Management, Vol.9(2), pp.153-172, 1995.

12) Kwak, D. H., Kang, J. H. ; The effect of self/team follower image congruence on spectator sport consumption behavior and team loyalty, International Journal of Sport and Health Science, Vol.6, pp.135-144, 2008.

13) 大西孝之, 原田宗彦; プロスポーツチームが行う地域貢献活動の消費者に与える影響:

大学生のチーム・アイデンティフィケーションと観戦意図の変化に注目して, スポーツ科学研究, Vol.5, pp.253-268, 2008.

14) Sutton, W. A., et.al. ; Creating and Fostering Fan Identification in Professional Sports, Sport Marketing Quarterly, Vol. 6(1), pp.15-22, 1997.

15) Matsuoka H, et.al. ; Direct and interaction effects of team identification and satisfaction on intention to attend games, Sport Marketing Quarterly, Vol.12(4), pp.244-253, 2003.

16) Wann, D. L.; Preliminary validation of the Sport fan motivation Scale, Journal of Sport and Social Issues, Vol.19, pp.377-396, 1995.

17) Trail, G. T., James, J. D. ; The motivation scale for sport consumption: A comparison of psychometric properties with other sport motivation scales, Journal of Sport Behavior, 24, 108-127, 2001.

18)大友暁子, 清水安夫; スポーツ観戦行動の規定要因に関する研究 - 社会的属性・スポーツ経験・意思決定要因を予測変数とした検討 -, 神奈川体育学会機関誌 体育研究, 第42号, pp.14-20, 2009.

19) Wann, D. L., et.al.; Motivation Profiles of Sport Fans of Different Sports, Sport Marketing Quarterly, Vol.17, pp.6-19, 2008.

20) Prochaska, J. O, DiClemente, C. C ; Stages and processes of self-change in smoking: toward an integrative model of change, Journal of Consulting and Clinical Psychology, Vol.51(3), pp.390-395, 1983.

- 21) 岡浩一郎; 行動変容のトランスセオレティカル・モデルに基づく運動アドヒアレンス研究の動向, 体育学研究, Vol.45(4), pp.543-561, 2000.
- 22) 原田和弘, 他; 運動無関心者の心理的準備性の変化と趣味・余暇活動との関連, スポーツ産業学研究, Vol.20(2), pp.199-209, 2010.
- 23) 片山祐実, 他 ; 趣味・余暇活動への興味を高めることを意図した介入が運動無関心者の心理的準備性に及ぼす効果, スポーツ産業学研究, Vo.21(1), pp.27-39, 2011.
- 24) de Vet, E., et.al. ; Determinants of forward stage transition from precontemplation and contemplation for fruit consumption, American Journal of Health Promotion, Vol.19(4), pp.278-285, 2005.
- 25) Etter, J. F, Perneger, T. V., ; Brief report associations between the stages of change and the pros and cons of smoking in a longitudinal study of Swiss smokers, Addictive Behaviors, Vol.24(3), pp.419-424, 1999.
- 26) 岡浩一郎; 運動行動の変容段階尺度の信頼性および妥当性－中高年者を対象にした検討－, 健康支援, Vol.5, pp.15-22. 2003.
- 27) Prochaska, J. O., et.al, ; Stages of change and decisional balance for 12 problem behaviors., Health Psychology, Vol.13(1), pp.39-46. 1994.
- 28) Robbins, M. L., et.al. ; Assessing family members' motivational readiness and decision making for consenting to cadaveric organ donation, Journal of Health Psychology, Vol.6, pp.523-535. 2001.
- 29) Caitlin B, et.al, ; Motivation for blood donation among African Americans:

developing measures for stages of change, decisional balance, and self-efficacy constructs; Journal of Behavior Medicine., Vol.32, pp.429-442. 2009.

30) Geoff R, et.al, ; Travel behavior change impacts of a major ride to work day event., Transportation Research Part A, Vol.41, pp.351-364. 2007.

31) 青木邦男; 在宅高齢者の運動行動のステージと関連する要因, 体育学研究, Vol.50, pp.13-26, 2005.

32) 石井香織, 他; 簡易版運動習慣の促進要因・阻害要因尺度の開発, 体力科学, Vol.58, pp.507-516

謝辞

大学4年の春、大学院進学を考えていた私に「将来スポーツに関わる仕事をしたいのであれば、一度社会人になってから戻っておいで」と、間野義之先生からアドバイスをいただいたことをきっかけに私の人生は大きく変わりました。庭球部員として目標を持ち続けた学生生活が終わった後も、「大学院に戻る」という目標を持って社会人生活を送ることができたことで多くのものを得ることができ、本当に貴重で大切な時間となりました。大学院に進学後も勉学の指導だけでなく、幅広い分野において実践のチャンスを与えていただき、前向きに取り組むことができたのも間野先生のご指導があつてこそと、大変感謝しております。

また、修士論文の作成にあたり、副査を快くお引き受けいただき、的確なアドバイスをいただいた岡浩一郎先生、松岡宏高先生にも深く感謝申し上げます。

長いようで短かった2年間で充実した時間となったのは、研究面では頼りになる学部同期であり助手の庄子博人先生、唯一の社会人経験者に遠慮せず接してくれた同期の石部真士くん、植村輝くん、高橋光くん、濱田翔吾くん、原口邦敏くん、福田雄介くん、舟橋弘晃くんがいたからこそで、それぞれが個性を発揮しながら過ごした時間は忘れることはありません。また、決して楽ではない仕事をしながら熱心に、時には横道にそれながら研究に取り組んでいた社会人修士の阿部雅彦さん、池野大介さん、石井光暢さん、大後重雄さん、橘晃嗣さん、長澤淑恵さん、松本湖成さんの存在はとても励みになりました。

そして、研究室の壁を越えて、楽しい時間も辛い時間も共有した原田研究室、木村研究室、武藤研究室の皆さん、同じ研究室の仲間として多くのサポートをいただいた、M1の

井上壽尚くん，小石原誠くん，田渕裕己くん，中村彩乃さん，藤岡成美さんにも心より感謝しています。その他にも，間野研究室 OB・OG の皆様や，本調査にご理解・ご協力をいただいた A 自治体の皆様，B 競技団体の皆様にも深く御礼申し上げます。本当に多くの人に支えられ，充実した時間を送ることができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

最後になりましたが，ふだんはなかなか口にするできませんが，自分の選択する道を温かく見守り続けてくれた両親，祖母，弟に心より感謝の気持ちを申し上げます。

2012 年 2 月 23 日

飯島 沙織